View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

『好色五人女』と韓国民話（野談）『青邱野談』の対照研究

――結縁様相及び女性意識を中心に――

朴　なり

はじめに――「野談」とは――

「野談」という言葉は、一七世紀以降から使用された新用語である。まず、以下の「野談」の定義をみると、

野談（やだん）［現地読み：ヤダム］

朝鮮の物語本。広く民間に伝わる野史、巷談、軍談などが収録されており、人情の機微や世態、風俗などが描かれている。また、庶民の鋭い風刺と機知に富んでいる作品も多く、朝鮮民族の心を知るうえでも貴重な資料といえよう。史話が正史をもとにしてつくられた物語であるのに対し、野談は一個人の手になる野史的なものが素材となった。したがって、より自由なフィクションの世界が展開されており、生き生きとした庶民の姿がそこには投影されている。（略）野談の代表的なものとしては、柳夢寅（りゅうぼういん）（一五五九―一六二三）の『於于（おう）野談』（五巻

一冊）、一九世紀のものと推定される『青丘野談』（六巻九冊）がある。最初漢文で書かれたものだったが、のちにハングルに訳され広く伝わった。なお、第二次世界大戦後、白大鎮（はくだいちん）らによって『韓国野談全集』全十巻（一九六四）などが出版されている。(1)

と書かれている。また、「野談」は両班（ヤンバン：朝鮮、高麗および李氏朝鮮時代の特権的な文武の官僚階級、身分）社会にまで流布された漢文で書かれたものという特徴をもっている。その内容として、逸話・伝説・民談・短篇小説等様々な形式の話が含まれ、説話と小説の間と分類される。すなわち、野談から漢文短篇を表出したのである。例えて言えば、講唱師と直結したパンソリ系小説について漢文短篇は講談師と関連された野談系小説とも云える。なぜならば、漢文短篇は民間的見聞を基に事実及び、虚構が混ぜ合わされた一貫的あらすじを持つ叙事性という口演された話を記録化したものであり、当初、はっきり定立され、創作意識を持って書かれたものではなかった。しかし、文人筆記達によって野談から漢文短篇に発展し、見聞記録の豊富な蓄積を通じて至った成果と見える。要するに、漢文短篇は形成経路で一次的に口頭創作を経た特修性から、現実を一緒に呼吸する沢山の人々の感覚から時代の客観的事実が話の真実に移り変えることが出来た。その話の真実は即して歴史の真実なのである。漢文短篇が至った現実性は発生させた当時の体系的変化が生じており、封建主義に対する抵抗的な力量が大きく成長したから故、漢文短篇が獲得した現実主義はすなわち、そのような歴史像の文学的な反映されたのである。従って、野談は韓国の古典小説の発展過程において重要な役割を持ったことが察れる。付け加え、「野談」は簡単な記事から奇異な伝説及び、あらゆる部類の歴史的人物に関する逸話等、様々な話題を持っている。その中でもおよそ一七世紀から一九世紀の現実を素材にした話として朝鮮時代後期の社会上を把握することができる。しかし、まだ日本では朝鮮文学の中でも「野談」という分野はあまり知られていない。このことを野崎氏は、

野談とは、李朝後期に生み出された漢文小説集を指し、柳夢寅（一五五九年～一六二三年）の『於于野談』が

その嚆矢とされる。その登場人物は、上は貴顕から下は奴婢（ノビ）・盗賊まで、あらゆる階層を網羅しており、まさに「李朝社会の万華鏡と呼ぶにふさわしい人物譚集である。人物譚または世間咄といえば、日本なら誰『今昔物語集』を思い浮かべるように、およそ何処の国の作品であれ、その人間臭いドラマが読者を楽しませてくれるが、野談の価値はそれのみにとどまるものではない。何故なら、野談は朝鮮文学史上においても極めて重要な位置を占めるからである。(2)

と、「野談」を高く評価している。さらに、「野談」という用語の使い方について李市埈氏は、

古代文献と朝鮮後期の本格的な説話集の記録伝承を総じて何と呼ぶべきか。とても難しい問題である。（略）数人の学者が著書や論文を通じて「文献説話」と言う名称を用いており、或いは「野談」または「漢文短篇」という名称を使っている。しかし、この二つの名称は主に朝鮮後期の記録説話が対象で（略）人々に口伝されたり最近に採録された説話を「口伝説話」と呼ぶことに対して、古代文献と主に朝鮮時代に入って成立したいわゆる「野談」を総じて「文献説話」という名称で呼ぶことを提案する。(3)

と説明しながら、

十八世紀後半から十九世紀前半までは前時代に活発になった散文精神がやがて実を結ぶ時期であった。文学思想の著しい散文化の傾向はパンソリ・小説・雑歌・長編歌辞・私説時調などの文学ジャンルを完成させただけではなく、説話も集大成させた。この時期に出来上がった代表的な説話集としては、『東裨洛誦』、『選言篇』、『海東野書』、『淫西野談』、『青邱野談』、『東野彙輯』のようなものが挙げられるが、特に最後の三つの文献はそれぞれ三一二編、二九三編、二六〇編の資料を収めており、韓国「三大文献説話集」と呼ばれる。(4)

と、『青邱野談』を韓国「三大文献説話集」として紹介している。言い換えれば、十八世紀中頃に書かれた『鶴山閒言』、『記聞叢話』、『選言篇』等の野談集を底本にした十九世紀中期の李朝鮮最高の野談集である。

ここで、本研究に先立って『青邱野談』について考察したい。

二、『青邱野談』の構成及び内容

『青邱野談』とは、一八二六年～一八三五年に編纂されたと推定、朝鮮時代後期の作品である。編纂者は未詳で、約三一二余りの短い内容の話は、漢文とハングル両方に書かれている。このような作品を韓国では「短形叙事」と呼ぶ。しかし、『青邱野談』は、李朝前期までの作品とは相違しており、作品の分量は短いながらもその内容が繊細である。その内容とは、ちまたの中、主に市井世界を基にして書かれ、当時の社会変化の諸般様相が著しく表現されている。すなわち、李朝の特徴と言っても過言ではない儒教思想を基にした封建社会の秩序の崩壊、身分制度の変化また、一部の両班階層の没落、被支配の階層の出身新興財閥の出現、その市井世界を批判しながらにも関わらず、現実を中心にする風俗等がそれである。こうした当時代の社会現実、及び価値観の変化が含まれた口伝は、一九世紀初半に到り、記録文学に転換されたが、『青邱野談』はその李朝後期の特殊な社会の現実、及び時代精神をよく反映されており、史料としてその価値も高く評価されている。

二―一、『青邱野談』の構成

『青邱野談』は、全六巻九冊の総三一二編中、八八編が女主人公話である。以下の表は、金辰宣氏[5]の表を基にして作ったものである。

①作品中女主人公の身分の分布図

両班	二七篇（三、五、七、八、九、一六、一七、三三、三七、四〇、四一、四二、四五、四六、四七、四八、四九、五一、五四、五六、五七、五八、六一、六九、七三、七五、八二）
平民	二七篇（一、六、一〇、一二、一三、一四、二〇、二一、二二、二三、二五、二六、二七、二八、三〇、三二、三四、三五、五〇、六五、六六、六八、七一、七六、七七、七八）
遊女	二〇篇（二、一一、一五、一九、二四、三一、三六、三八、四三、四四、四七、五二、五三、五五、五七、五九、六〇、六二、七四、八〇）
奴婢（ぬひ）	九篇（四、一八、三九、四〇、五三、六四、六七、七〇、八二）
その他	五篇（二九、六三、七五、七九、八一）

②作品中女主人公の設定

考婦	四三編
烈女	二二編
悪妻	二編
不倫	九編
滑稽	三編
その他	九編

右の表①作品中女主人公の身分の分布図をみると、まず、作品中の女主人公の身分は、主に両班・平民・賤民という三つに分けられており、その中でも両班二七編、平民二七編が過半数以上を示している。その理由として考えられるのは、作者が両班であることながら、かつ読者の割が字を読める両班であることと、農業社会であった当時の朝鮮時代に農民である平民の割が一番多かったことと推測される。これは、読者が一番身近く同感できる重要な要素の一つだと考えられる。また、『青邱野談』は「野談」の特徴でもある教訓性を持つ作品だということもあり、特に両班の女性談では歴史上にも指名度が高い人物として実名が紹介する場合が多い。これは、歴史的話が文字化する過程で説話文学と一定の関係を持っていると考えられる。それゆえに、表②作品中女主人公の設定も、考婦四三編と烈女二二編と過半数以上の割になっている。

三、両国の女性教育の基本書

まず、作品を対照する前に両国の当時の女性たちの思想を基にする教育書についてみたい。江戸時代の社会と身分制度の安定のため、権力者によって取り入れられた儒教思想は、武士は勿論、町人を中心に庶民階級にまで影響を及ぼした。確かに、江戸時代は仏教・儒教・神道の三思想が共存していた為、庶民階級の中で、儒教思想という概念がその本質的部分において深く浸透していたことまではいえないだろう。しかし、寺子屋などを通じて、儒教の礼法ではなくその精神が、町人をはじめとした庶民階級に属する女性にまで学ばれていたのである。したがって、儒教論理が庶民、しかも、一般の女性の日常生活までその影響を与えたことは否定できない。

三従・七法などの儒教論理を守りながら、一生「好い娘」・「良妻賢母」を願う親、夫、また、世間一般にとってこそ、理想的上品な女性像であった。ところが、西鶴は儒教論理から見て模範とする女性理想像に反するような女性の登場人物を数多く作品の中で描かれている。今回、取り上げる西鶴の『好色五人女』に登場する女主人公も例外ではない。

『女大学』の十九頁目は、当時の女性なら守るべき道理であったと思われる。『女大学』は貝原益軒の『和俗童子訓』・宝永七年（一七一〇）巻五の「女子を教ゆる法」に基づいて作られたもので、享保元年（一七一六）大阪の柏原清左衛門と江戸の小川彦九朗の合梓『女大学宝箱』として、江戸中期以後広く流布し、女子教訓書として出版された。

ところが、石川松太郎氏(6)によると、『女大学』が出現するまでの近世前期には、中国で編まれた女訓書がただちに移植されて学習されていたようで、中国の『女考経』、『女論語』、『内訓』を意訳抄録した『女四書』などは儒教原

理によって、男尊女卑の思想と良妻賢母への教養を啓蒙していたと述べている。また、『女大学』は近世後期から近代の初頭にかけて女性教育の教科書及び教訓書として様々な階級の女性に読まれたことから『女大学』が日本の儒教と女性に与えた影響は大きいものだったと推測することができると解釈している。

一、（前略）我人に勝り顔なるは、みな女の道に違るなり。女は、唯和ぎ順ひて貞心に、情深く静なるを淑とす。

二、女子は稚より、男女の別を正しくして、仮初にも戯たることを見聞しむべからず。（後略）

三、一度嫁しては、其家を出ざるを、女の道とすると、古しへ聖人の訓なり。若女の道にそむき、去るる時は、一生の恥なり。

四、されば婦人に七法とて、悪きこと七あり。（中略）三には、淫乱なればさる。

四には、悋気ふかければさる。（後略）

五、嫉妬の心、努々発すべからず。

六、若き時は、夫の親類・友達・下部等の若き男には、打解たる物語、近付べからず。男女の隔を固すべし。如何なる用有とも、若男に文など通はすべからず。(7)

右の例文は貝原益軒の『和俗童子訓』の中、男女関係に関する部分だけ抜粋したのである。その内容として、当代の女性に貞節・貞淑を守り、夫に順従すべき等は、朝鮮時代に女性に求めたのと大きく相違な点は見られない。それは朝鮮時代でも同様であった。

昭恵王后韓氏は学識が高く、当時女性たちの教育書であった「烈女」や「小学」「女教」「明心寶鑑」などを熟読、それらを編纂、整理し、「朝鮮の女性のため」の教育書「内訓」を漢文で書きあげる。全7章3巻からなるこの本は、1章「言葉使いと行い」、2章「父母に孝行」、3章「婚儀の礼義」、4章「夫婦」、5章「母としての行い」、6章「親族との付き合い」、7章「清廉と倹約」と、間違いなく女必従夫、三従之道、七去之悪など男性

中心の儒教思想をそのまま反映していると言える。各章ごとに40種余りの経典と50人余りの行状を引用、女性の行いの実際や規範を説いている。また、ハングルに翻訳させ、その翻訳文の中に注釈を入れ読みやすくしている。「内訓」は、親孝行や忠臣、烈女の中から行いが飛びぬけている人々の話を挿絵入りで書いた「三綱行実図」と共に、当時の女性教育の基本書となった。(8)

と、朴珣愛氏は、昭恵王后韓氏（一四三七～一五〇四）が書いた「内訓」が、当時の女性教育の基本書として、婦女子たちに大きな影響を与えたと述べている。したがって、本研究の作品『青邱野談』にも、この女性理想像に適しているのではなかろうか。

このように、江戸時代と朝鮮時代は同様な思想を基にした社会において、女性達は理想的な女性像になるため、一生懸命努力しなければならなかった。しかし、読者たちは、当然なことより現実に反っている巷の世界を知りたがっているに違いないではなかろう。これは、『青邱野談』にも同様に見られる。現実的内容と民談のような非現実的内容の調和の中に作品の面白さがよりアップしたりもしている点等がそれである。従って、『好色五人女』巻一と巻三と『青邱野談』の幾つかの作品から両国の結縁様相を対照しながら、女性理想像を考察してみたい。

四、『好色五人女』と『青邱野談』

四―一、男と女の滑稽な忍び会いと男の死に後付いた女と後れた女

『青邱野談』の巻十四の十「営妓佯狂随谷倅」（官営の遊女が狂病のふりをして谷山の群守を従う）は、「梅花」という谷山に住む妓女が貞節を守って自決する話である。朝鮮の妓女は日本の遊女と類似しており、一般的「路柳墻花」と言われ、一人の男性に貞節を守るという概念は矛盾する。しかしながらも、江戸の作品中でも多数発見するこ

とができるように朝鮮の野談集でも多数発見することができる。それは、『青邱野談』でも例外ではない。『青邱野談』でも江戸時代の作品と同様に貴族及び、庶民以外の貞節の話しは数少なくない。ここで、左の例文は『青邱野談』の巻十四の十（官営の遊女が狂病のふりをして谷山の群守を従う）のあらすじである。

梅花という谷山の遊女がいた。ある老吏が巡使で谷山に来た時、梅花を気に入り、自分の傍においたが、監察に来た代官が梅花を見て一目ぼれをする。その後、代官は彼女の母に毎回厚くもてなして、彼女と会うように頼む。ある日、①母親は、病気の口実して梅花を呼び、代官と会うようにして、二人は相愛の仲となる。梅花は官営に戻っても代官に会うため、老吏に狂病だと嘘をついて実家に戻り、代官とさらに深い関係になる。吏が梅花の病が嘘だと気付いたのを知った代官は老吏を謀略して巡使を罷職させ、梅花を妾にする。数年が過ぎた或る日、②代官が丙申の政乱に絡まれ入獄した時に、代官の妻が梅花に実家へ帰ってもいいと勧誘するが、今にきて代官を裏切られないと言って家に残る。その後、代官の死を知った妻は自決し、その二人を埋葬してから梅花も自決する。(9)（訳：朴なり）

右の傍線①をみると、男と女の滑稽な忍び会いの場面が思い浮かぶ。『好色五人女』の巻一の第三章でも、但馬屋の女達の春の花見の時、清十郎は密かに太神楽の獅子舞を語らって置き、人々が見物に夢中になっている間にお夏と密会を遂げる場面がある。また、ここで、特にユニックな所は、『青邱野談』の巻七の本文中、

十餘日後에 梅花가 忽然 病을 얻어 寢食을 廢하고 여러 날 呻吟하니 巡相이 근심하여 醫藥을 雜施하되 效驗이 없는지라. 將近 一旬이러니, 一日은 蹶然히 일어 蓬頭鬼面으로 손뼉치고 발구르며 미친 소리와 雜된 말이라. 或 웃으며 或 울어 大廳에 뛰놀며 巡使의 姓名을 斥呼하고 사람이 或 붙들면 차고 물어 앞에 가까이 못하게 하니 곧 한 狂病이라. 巡相이 驚駭하여 하여금 밖에 내어보내어 제 집으로 還送하니 大概佯狂이라.

（十余日後、突然梅花が誰も知らない病で飲み食いを一切できない。これを知った老吏がいろんな薬を使ってみても効かなかった。或る日は、急に立ち上がり暴れたり、叫んだり、笑ったり、泣いたりする。また、或る日は老吏の名前さえ呼び捨てし、さらに、もし、周りの人が引き留めたりすれば、その人を蹴ったり、噛んだりして近寄らなくようにする。即ち、狂病である。老吏は驚き、彼女を実家へ帰らした。）（訳：朴なり）

と、梅花は代官を密会のため、狂病のふりまでする場面がある。次に、傍線②をみると、『青邱野談』では、男の死について自決として貞節を守ろうしている。しかし、梅花は妾なので貞節を守らなくていいという代官の言葉に、

梅花가 또 울어 가로되,

「賤妾이 令監의 恩惠을 입사온 지 또한 오랜지라. 繁華時節에는 더불어 安享하고 患亂時節에는 어찌 背反하리오. 죽을 따름이언정 어디가리오.」

（梅花が泣ながら曰く、「私が旦那様のお世話になった日も、もう長いです。華麗な時、幸せに過ごして、このような大変な時、私がどうやって裏切ることができるでしょうか。死ぬとしてもどこにも行きません。」）（訳：朴なり）

と、最後まで代官に尽くすとする。これは、先に述べたように、当時の女性理想像を描いた「内訓書」の教えであるとともに、その影響は両班だけではなかったと考えられる。

朝鮮のその以前までの貞節儀式は、家門と社会の秩序のため、女性に強要して来た朝鮮の需教社会中の規範倫理であった。しかし、梅花の貞節は自分の愛に対する自我の意志のとおりに行った行動であり、当時の社会の制約を克服したことから、大きな意義があると思う。また、このような話の終結が「立節死義」という構成で、すなわち、朝鮮後期の妓女の素材とした説話は少なくなかったことから、一つの流行と見る見解もある。(12)

このように、『青邱野談』では、女の貞節は自決という物語が殆どだが、朝鮮後期に入るとともにその概念は少し

ずつ変化するのが見られる。その例話は後ほど拠論する。

そして、以上の作品の対照する『好色五人女』巻一の二人の女主人公の場合を見てみたい。左は、『好色五人女』巻一「姿姫路清十郎物語」中、清十郎の死を知った遊女「みな川」が、彼に追いかけ自決する前のセリフである。

みな川が身にしてはかなしく、ひとり跡に残り、涙に沈みければ、（中略）みな川、白装束してかけ込、清十郎にしがみつき、死ずにいづくへ行給ふぞ。さあさあ今じやと、剃刀一対出しける。（中略）やれ今の事じやは、外科よ、気付よと立さはく程に、何事ぞといへば、皆川ぢがいと皆皆なけきぬ。(13)

と、皆川は彼への愛のため、嘘をついていると言いながらも、結局、自決という極端的方法を選ぶわけである。ここで、矢野氏は、皆川の死の選択について、

皆川は遊女でありながら勤めに徹することを拒否したわけであり、死ぬことによって色道を越えてしまったと云える。(14)

と、解釈しているが、むしろ言い換えれば、自決まで至る皆川を恋のため自分を犠牲する女性理想像に描かれているとも言える。一方、清十郎がその次に出会う町人である一般女性の「お夏」と出会う。そして、その紆余曲折を経た後、但馬屋に七百両の金が紛失した事件の疑いで死刑された清十郎の死を知る。そのお夏の反応は、

おなつも同じ嘆にして、七日のうちはだんじきにて、願状を書て、室の名神へ命乞したてまつりにけり。（中略）おなつそだてし姥に尋ければ、返事しかねて涙をこぼす。さてはと狂乱になって、生ておもひをさしやうよりも、と子供の中にまじはり、音頭をとってうたひける。(15)

と、お夏は清十郎の死を知り、一時には気が狂う時もあるが、理性を取り戻し「大経のつとめおこたらず、有難きびくいとはなりぬ。」と尼になると美化されている。この場面は遊女の皆川と対比的である。それを竹野静雄氏は、皆川とお夏は遊女と町人という身分の差があるので作者である西鶴は二人の女性の結末に差別をおいたと主張してい

る[16]が、自決や尼になり、一生自分が愛した彼のため、供養するのも一人の女性として自分を犠牲にする形態は儒教思想という封建制度の影響に及ばした典型的様相だとも言えよう。

四―二、男と女の滑稽な逃避行

前章のように、近世封建制度社会においては自由な恋愛が禁止され、それ自体が罪悪視されたことは言うまでもなく、遊里以外の場における恋愛は犯罪という今の時代ではありえない反社会的な扱いを受けられなけえればならなかった。そして、この『好色五人女』巻三「中段に見る暦屋物語」の女主人公である「おさん」も例外ではない。巻三「中段に見る暦屋物語」は不倫話として、その不倫は意図的ではなかったが、結局、処刑という悲劇的結末に及ぶ話である。しかし、描写されているおさんは不倫という罪を犯したにも関わらず、同様な巻二のおせんとは相反して書かれている。例え、おさんの最後は左のように描写されている。

九月二十二日の曙のゆめ、さらさら最期いやしからず、世語とはなりぬ。今も浅黄の小袖の面影、見るやうに名はのこりし。[17]

と意図的不倫ではなかったが、一段、恋に落ちた以後には自分の恋に対する犠牲的な人物に描写されている。また、おさんが愛する人である茂右衛門との人生のため、次のように茂右衛門が闘病生活中にも希望を捨てない姿で描写されている。

薬にすべき物とてもなく、命のおはるを待居る時、耳ぢかく寄て、今すこし先へ行ば、しるべある里ちかし。さもあらば、此浮をわすれて、おもひのままに枕さだめて語らん物をと、なげけば、此事おさん耳に通じ、うれしゃ、命にかへての男じゃものと、気を取なをしける。さては、魂にれんぼ入かはり、外なき其身いたましく、又負て行程に、…[18]

これを森川昭氏は、

過失とはいえ、主人の女房と雇人という立場にありながら姦通を犯したおさんと茂右衛門は、「元禄御法式」や「律令要略」示されるごとく、ともに死罪を免れることができない。しかし、夢からさめて、過失に気付き、また逃れ得ぬ運命を認識したおさんの「よもやこの事、人に知れざる事あらじ。この上は身を捨て、命をかぎりに名を立て、茂右衛門と死出の旅路の道づれ」という言葉には、追いつめられた者の絶望的な響きはない。むしろ、意志なき姦通をきっかけとして、限られた命を、好色へ意志的に踏み出して行くおさんの姿には、不思議な明るささえも感じられる。(19)

と解釈している。このような、男に対する女尽くし話は、どこの国でもあり得るエピソード―であり、江戸時代も朝鮮時代も当時の女性教育に基づいた女性理想像でもありながら、むしろ、その以前の問題かもしれなかろう。

それに対して朝鮮時代では、江戸時代と違って「姦通罪」という法律がなかったものの、また、「離婚」という概念もなかった上、例え、夫と死別したといっても再嫁することも社会的に認めなかった。しかし、朝鮮時代後期に入ってから、その考え方は徐々に変化していくのである。左は、『青邱野談』巻十三の八「憐孀女宰相囑窮弁」（宰相、死に偽りて娘を再嫁させしこと）のあらすじである。

昔、ある宰相の娘が結婚して一年も経たない内に夫を失い、実家に帰って暮らした。宰相は娘の寂しさを見て心が痛かった。そして、ある日、宰相は家に出入りするある独身の困窮な武弁に白銀と黄金をあげながら、罷漏〈朝鮮時代は夜間外出禁止という制度があったが、大鼓が鳴ると夜行禁止が釈除された。〉後に家の後門に馬を持って待ちなさいと言った。武弁は半信半疑だったが、その通りにすると、①宰相は娘を袋に入れ、馬に乗せながら、「北関へ行って身を隠して住みなさい。」と言った。そして、武弁が去った後、宰相は娘が自決をしたふりをし、娘の葬式を行った。

数十年が過ぎたある日、宰相の息子が官人となり、地方を監察する際、北関を行くようになった。行く途中、宿に泊まる時、偶然に姉と会って驚いたが、今までの訳を聞いて幸せに暮らしているのを知った。そして、家に帰り、②父に北関で起ったことを話ししよとすると、父は驚きながら口を閉じたままであった。[20]（訳：朴なり）

この話は、夫を早く死別した娘をかわいそうに思い、父が娘を自決に装って男と夜逃げをさすという当時の社会に反映された滑稽な話である。傍線①は男と女の滑稽な逃避行を連想させるが、これは『好色五人女』巻三で、美人でよい主婦でもあった妻おさんが、戯心のきっかけで一晩一緒に過ごした茂右衛門と逃避する場面と同じく、死に偽って逃避する。しかし、その結末は『好色五人女』巻三のおさんと相違している。また、傍線②内容から娘の幸せのために世間の道理を逆らった父であったが、息子にまで娘のことを知らせられない当時の社会の状況を見ることができるユニックな表現だと解釈できる。そして、このような、社会に認められなくて逃避をする話は『青邱野談』にもしばしば書かれているが、身分社会という当時の朝鮮時代の社会的構造上、様々な形で表われそうにも関わらず、身分のちがい上の逃避話は数少ない。それは、朝鮮社会上に「姦通罪」がない理由として「一夫多妻」という当時の社会的通念があったからではないかと推測できる。また、作品に収録されている殆どがハッピーエンドという所も教訓性と男性中心思想という作品の特徴が強いからではないかと考えられる。その例として、いくつか紹介したい。

左は、『青邱野談』巻七の一「聽妓語悖子登科」（遊女が横道な者を科挙（朝鮮時代の官職試験）に合格させる）のあらすじである。

平養の監司の息子がある遊女と深い愛の仲であった。監司の任期が終わって漢陽に戻るようになり、別れるようになる。しかし、息子が遊女を忘れずに学問の深淵を彷徨う姿を見た父は息子を山に行かして学問に打ちこむに願うが、息子は山から逃げて歩いて平養の遊女に会いに行く。その遊女は官営から出られない立場だったが、息子は官営を忍びこんでやっと遊女と会うようになる。しかし、遊女は息子を逢っても知らんふりをし、息子は

がっかりして宿に戻るが、深夜、遊女が金銀を持ってきて一緒に夜逃げする。ある所で金銀を売って家を買った後、遊女は息子が学問に熱中するように尽くし、ようやく、科挙に合格するようになる。それを知った父は死んだと思った息子が科挙まで合格したのはすべて遊女のおかげだと思い、遊女との関係を認める。[21]（訳：朴なり）

右の話は、横道な者である両班の息子が夜逃げをしましたが、遊女の尽くしで科挙に合格した理由だけで、父は息子を許し、その遊女まで妻に認めるという当時の通常ではあり得ないことを野談らしく滑稽に書かれている作品である。次の話は『青邱野談』巻一「誇丈夫西貨満駄」（昔日の不倫、今日の財産となりしこと）のあらすじである。

昔、ある士人（まだ官職についていない士大夫のこと）が科挙を受けるため、ある村で部屋を借りた。ある日、その家の主人が留守で妻一人だけを知った士人はその妻を引き寄せ、自分のものにしようとする。その妻は、自分の家の部屋を貸した客でもあり、大声を出したら周りの町人が知られることを恐れ、そのまま身を任せた。その時に突然、夫が帰って来て士人の部屋に入ろうとすると、士人は彼女を彼女の服である裳に隠してその危機を脱がれる。その数年後、その士人は科挙に合格し、平安道に監司になって赴任した。それを聞いた夫は喜び、なんか得るものでもあるか会いに行くが、何も得ることなく、帰って来る。その後、妻が自から行って見ると言って彼に会いに行き、再び情を交り、たくさんの財物を持って家に帰って来る。それを見てびっくりしている夫がそのわけを聞くと妻は数年前の事情を話す。

妻は笑って答えた。「あなたは、使道（地方長官への敬称。または軍の中で上官に対する呼称）様が科挙でこちらにおられた時、部屋で雲雨の事に励まれていたことであったのを覚えておられませぬか。」男はしばらく考えこんでいたが、あっと声を立てた。「ああ、あった、あったぞ。しかし、その時その相手が誰だったか、今も見当がっかぬが。」「それは私でしたのよ。」女が笑いながら告げると、男はようやく事情を悟り、驚き且つ悔しがって言った。「あの時、おまえが奴の下にいたと知っていたなら黙っていなかったし、それに今度の土産はこ

の程度ではすまなかったものを。」と、二人して大笑いするのだった。[22]

右の話は、夫が妻の不倫を知ったにも関わらず、身分上また、財産目当てで妻の罪を見逃すという野談らしく、滑稽な話ながらも朝鮮時代後期の社会的背景がよく反映して書かれている作品で言っても良い。まず、その一つとして夫が妻の不倫を知ったにも関わらず、怒るところかそれをネタにし、使道からもっと物を得られなかったのに悔しがっている。それは当時の朝鮮後期の社会がいかにも混乱期で貧しかったのが伺える。また、妻の不倫の相手が現在、夫、すなわち、自分より身分が高い点も社会通念上、訴えるところか、しょうがないというニュアンスが伝われる。そして、二つとして妻の態度である。右の例文を見ると、妻は夫ができなかったことを妻ができたことに対して不思議に思っている時に、自ら自分の不倫したことを笑いながら党々と夫に自白する。いくら一般の庶民といっても、朝鮮時代の儒教思想を基にした封建社会ではあり得なかろう。しかし、この話は事実話がそうではないかの問題はあまり重要ではなかろうか。この野談は一般の庶民ではなく、ある程度身分が高い両班が書いた点から、まだ、日本の江戸時代と違ってより身分差別の厳しさを表しているのではないと考えられる。

おわりに

以上、西鶴の『好色五人女』と韓国民話『青邱野談』を結縁様相及び女性意識を中心に対照研究を行った。『好色五人女』と『青邱野談』の編纂時期は約二〇〇年余り差があるが、今回の研究は両作品の比較のではなく、対照研究という点に注目してほしい。両作品は、二〇〇年という時間の差また、共通する典拠作品もないまったく相違する作品になるかもしれない。しかし、封建社会という各作品が書かれた当時の各国の社会制度を基にして影響を受けられた各作品の女主人公の特徴は類似しているに違いない。特に、封建制度に基づき、江戸時代の『女大学』と朝鮮時代

の『内訓』の教えで育たれた当時の女性達には、各国の特有性が多少見当たったものの、その範囲は大きく反らなかったと言える。つまり、江戸時代と朝鮮時代の女性たちは同じく、当時の封建社会による儒教思想の影響を受けられながらも各国の特有性がまじ合っている女性理想像を描かれていたことが明らかになった。

また、本研究では、朝鮮民話の『野談』というものが、一つのジャンルとして韓国にあることを紹介する所に中心とし、対照研究するに不十分な所が多かったと言っても過言ではないが、犯罪物語、モデル小説として評価されている『好色五人女』が『青邱野談』と類似した構造であることには間違いないと考えられる。

『好色五人女』の時代に、仮に良く知られた事実があったとしても、その多くは芝居・歌謡・巷説等によって作られた〝実説〟に過ぎなかったはずであり、現在迄に紹介された物に限って見ても、それらが真実を特定し得るようなものではなく、異説粉粉としているのは周知の通りである。ましてや、当事者の心理に迄踏み込んだ真実を知ることなど殆どあり得なかったと考えられる。（略）だが、『好色五人女』に描かれた事件の顚末や、人々の心の動きは、仮にそれが巷間に伝えられたままのものであったにしても、西鶴がそれを真実と見做して作品の世界に取り入れ、彼の目を通して表現されているとするならば、本質的には総フィクションであったと云えなくはずである。[23]

と、矢野氏は『好色五人女』を実際の事件を作品の素材としているだけで、この作品はあくまでもフィッションつまり、小説として扱っていると説明している。このようなことは、朝鮮の『青邱野談』と同様な性質を持っている。特に『好色五人女』は、書かれた時期から事実をモデルにしてフィッションを試みたことは大きな意義を持たれると考えられる。

註

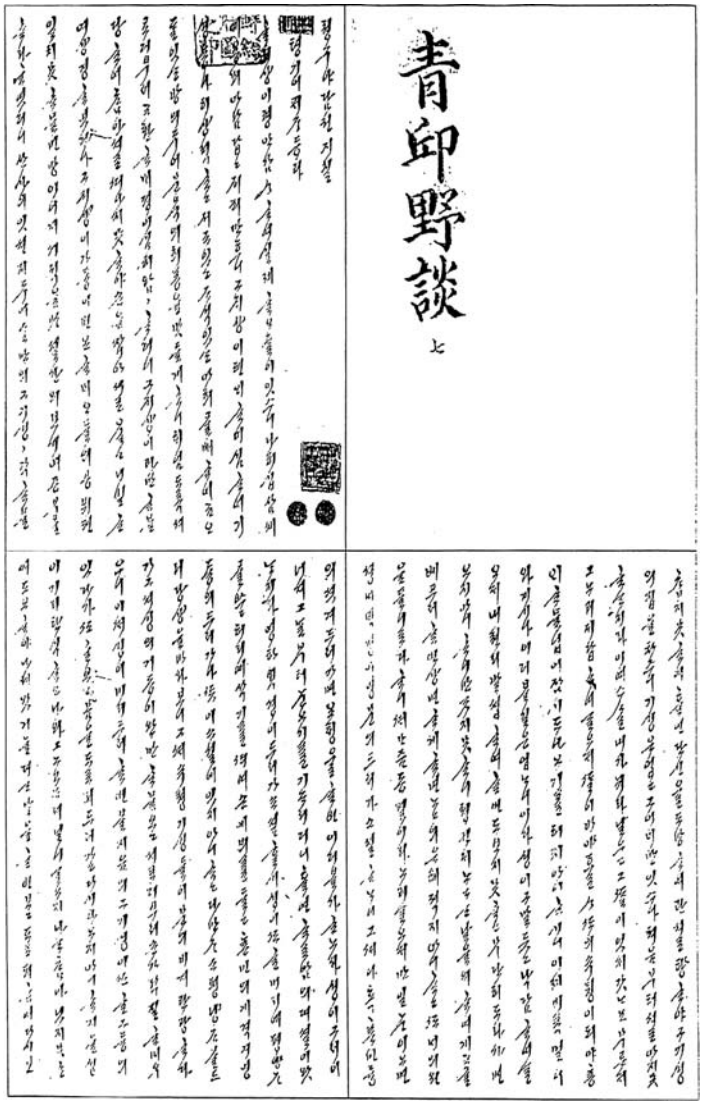
(1) 尹學準氏『日本大百科全書』小学館　一九九三年
(2) 野崎充彦氏『青邱野談―李朝世俗譚』平凡社　二〇〇〇年
(3) 李市埈氏　韓国の説話と説話研究「韓国における説話文学の研究現況」（雑誌『説話文学研究45』）二〇一〇年
(4) と同じ
(5) 金辰宣氏　論文「野談集所載女性談の存在様相研究」慶熙大学院　二〇〇六年
(6) 石川松太郎氏『女大学集』平凡社　昭和五十二年
(7) と同じ
(8) 朴珣愛氏「「考婦」であり「暴嬪」」朝鮮新報　二〇〇九年
(9) 崔雄氏『注釈　青邱野談Ⅲ』国学資料院一九九六年
(10) と同じ　六四～六五ページ
(11) と同じ　六六ページ
(12) と同じ
(13) 『好色五人女』（新編西鶴全集第一巻―本文篇）（校注）富士昭雄・小川武彦　勉誠出版㈱平成十二年　三九八～四〇〇ページ
(14) 矢野公和氏『西鶴論』若草書房　二〇〇三年
(15) と同じ　四五五ページ
(16) 竹野静雄氏『江戸の恋の万華鏡：『好色五人女』』新典社　二〇〇九年
(17) と同じ　四四九ページ
(18) と同じ　四四九ページ
(19) 森川昭氏「井原西鶴好色五人女の〈おさん〉魂に恋慕入かわり」（雑誌『国文学解釈と教材の研究』巻二十七・十三号）一九八二年
(20) と同じ『青邱野談』巻十三の八「憐孀女宰相囑窮弁」（宰相、死に偽りて娘を再嫁させしこと）
(21) と同じ「聽妓語悖子登科」巻七の一（遊女が横道な者を科挙（朝鮮時代の官職試験）に合格させる）
(22) と同じ『青邱野談』巻一「誇丈夫西貨満駄」（昔日の不倫、今日の財産となりしこと）
(23) と同じ

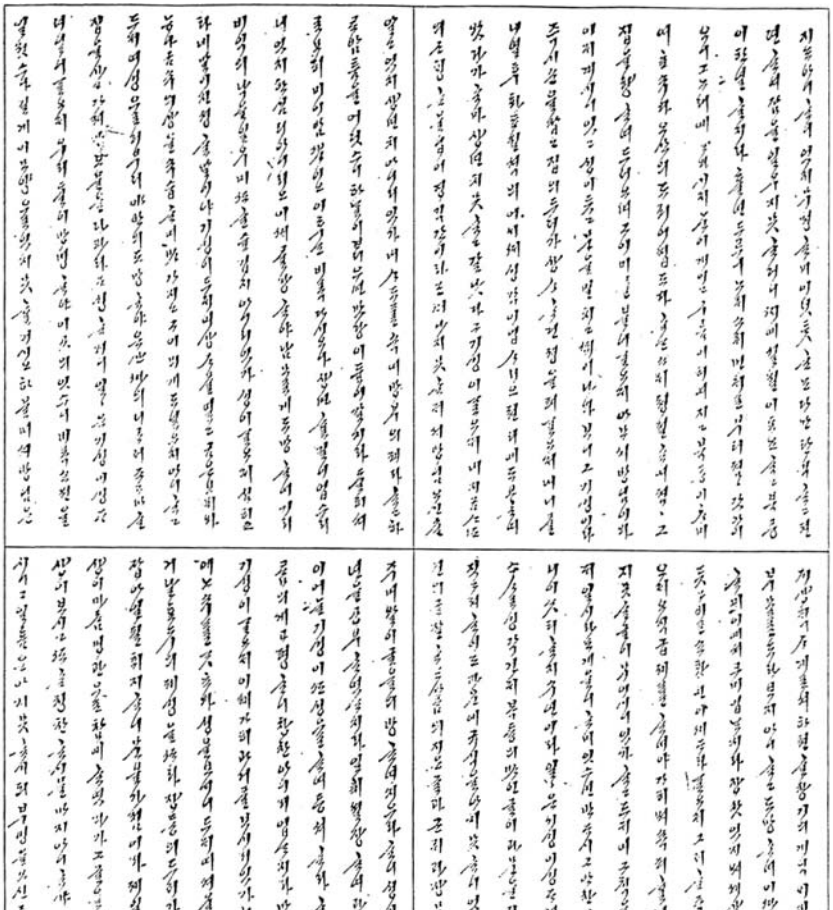
――大学院文学研究科博士課程後期課程――

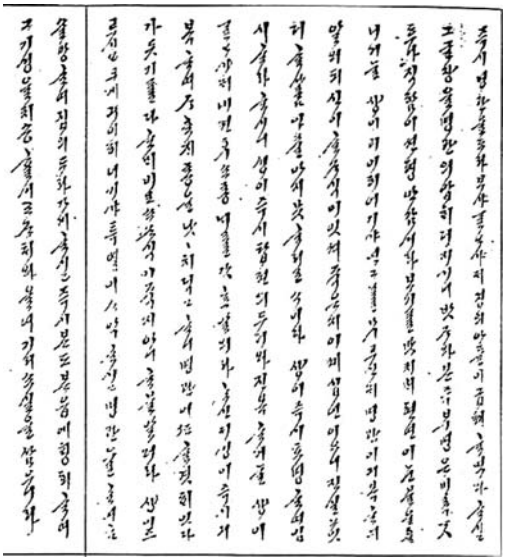
※『青邱野談』
韓国学中央研究院（Jangseogak Royal Archives）二〇〇〇年
（出所：http://yoksa.aks.ac.kr）

＊『青邱野談』巻十三の八「憐孀女宰相囑窮弁」の漢文の原文
『青邱野談上・下』（栖碧外史海外蒐佚本 29）韓国：亞細亞文化社　一九八五年

＊『青邱野談』巻七の一「聽妓語悖子登科」のハングル原文
『注解：青邱野談Ⅰ・Ⅱ』崔・ウン　韓国：国学資料院　二〇一〇年







＊朝鮮時代昭恵王后の『内訓』
韓国学中央研究院（Jangseogak Royal Archives）二〇〇〇年
（出所：http : //yoksa.aks.ac.kr）